



和田傳全集

第一卷

和田傳全集 第1卷

定價 2,600 円

昭和五十三年二月二十五日 発行

著 者 和 田 傳

発 行 者 高 橋 芳 郎

(〒 162)

東京都新宿区市谷船河原町十一

発 行 所 社 団 家 の 光 協 会 ©

電 話 (260) 三 一 五 一 (大代表)

振 替 東 京 5 1 4 7 2 4

印 刷 三 松 堂 印 刷 株 式 会 社  
製 本 寿 製 本 株 式 会 社

書籍コード 0393-54601-0301

和田傳全集 第一卷

和田傳全集（第一卷）目次

|      |     |
|------|-----|
| 山の奥へ | 5   |
| 村の次男 | 39  |
| 一町三反 | 71  |
| 急曲線  | 93  |
| 村の次席 | 118 |
| 深い墓  | 144 |
| 新しい血 | 165 |
| 屋敷   | 186 |
| 最後の墓 | 210 |

物置と納屋

鶏供養

旧道

同胞

村入り

波

隣村の祭り

俘虜

藁家生きている

236

251

274

285

309

329

348

368

382

解説

赤星虎次郎

装幀  
舟橋菊男

題字  
久住和代

## 山の奥へ

昨日一日、山から山をあさり歩いてとって来た山栗の実を三升ばかり、うす穢い風呂敷で無造作にくるんで、小脇にかかえこみ、勘作爺は吉見の大尺の門の石段をのぼって行った。

と、やにわに胸がさわぎ出した。眼から這入って来た忌わしい光景と、耳から来たがらがら……という異様な音響とが同時に勘作爺の胸をうんと一と押しあとにたじろがせるように働きかけて来た。……ああもあろうこうもあろうと吉見の奥様の嬉しがる顔を描きつづけて来ていた勘作爺の頭には、名状し難い、しかも打ち克ち難い迷乱が響きを鳴らして崩れかかって来た。

そうではありながら、勘作爺はやはりその光景の中に自分を加入させに行かないわけには、その際いかなかつた。そこは秋の真昼の光をまともに受けた、土蔵の前の仕事庭で、一人の洋服を着た男が、しきりに機械を運転させては喋っていた。それが稲をこく機械であることは勘作爺には一と目でわかった。大旦那と奥様と若旦那とそれに使い小僧とが、機械を見つめたり、男の言葉にうなずいたり、または互いに囁き合ったりしていた。……勘作爺の胸はもう一ぱいになった。

——勘作や、まあこっちへ来う。旦那は、こう言つて勘作爺をむかえたが、直ぐまた機械の方へ顔をもつて行つてしまった。のそのそと勘作爺はそばに寄つて行つた。

——旦那、いまさら効能を述べたてる程じゃありません。……実は何ですよ、旦那なんかがまっさきにこう言うものをお使いになつて、まあ村の毒見つてようなものをして下さるのが順なんです。そいつをあべこべじゃございせんか。誰もかも借金しても買つてるんですよ。……使つて下さいませよ、ねえ旦那。と、機械屋はしきりに喋りたてていた。

——おつと機械屋さん、待ちねえ、そりゃ百姓で食つて行く者と旦那なんかたあ訳がちがうだ。旦那のそこはこの小僧一人の気ままな百姓だ。百姓というよかも野菜作りぐれえのもんだ。米が幾俵出来るとお前さんは思うんだい。勘作爺は太い、八頭芋やつがしらのような指を押し出してつけ加えた。——せいぜい二十俵が関の山なんだぜ、機械屋さん。

勘作爺の頭では、最初乱脈のまま騒ぎたてていたものがすでに整えられようとしていた。はっきりとしたかたちをとろうとしていた。爺はほつとした。そしてどかんと地に腰を下ろして、煙管をとり出しながら爺は考えた。どう考えてみても、この機械屋さえ追いついてしまえばそれで文句はすっかりなくなる、としか考えられない。と同時に、もしこの機械屋がうまくゆくと、自分の立つ瀬がなくなつてしまふようになる、と、はっきり考えられて来る。そう思うとまたむかつとなりたがる。こうなるともう言葉にもいちいち気をつけなければならなくなつて来る。

——旦那、とにかく旦那が一台使つて下さらないというわけはありませんよ。まったく旦那考えて下さいよ、こんなやつが眼の前で唸うなっていますのに、むかしのやつで働けますかね、一体。……とにかく一度使つてみて下

さいまし。そうすりやもう思案もへチマもなくりますよ。まだまだ穀臼からうすの機械もございますし、繩をなう機械もありませんで。……同じことを二度も三度も機械屋は述べたてていた。

と、勘作爺はまたむかむかとなった。突然に穀臼のことが思い出された。春の間に、一生懸命に念を入れてこしらえた穀臼を、この秋には旦那に使ってもらおうと思っていたのだった。

——勘作、お前思いきってこいつを使ってみないかな。と、旦那は勘作爺に笑い顔をつくって言った。

——駄目だ、旦那、そいつあゝ駄目だ、ねえ旦那、俺とこの小僧とでたかが二十俵ぐれえの米、こんな機械を使うって法はねえだ、旦那。

この機械が這入って来ると自然、穀臼の方もあぶなくなるという考えが、勘作の言葉をますます露骨にさせた。若旦那と奥様の心がどう傾いているかは、その表情では見てとれなかったが、大旦那が、少なからず心を傾けているということは勘作爺にはよくわかった。

——ええッ、わからねえな、機械屋さん、駄目だ、駄目だよ。そのがらがら……ってえ音が気に食わねえ。第一にだ、仕事ってものはな、ゆうゆうとやるもんだ。疲れたら煙草を飲むさ。そんな蜂の巣をつついたようながたがたした心持ちじゃ、いい仕事が出来やしねえ。

——唄もうたえないしねえ、勘作。と、奥様がはじめて言った。

——まったくだ、まったくでな、奥様、はっはっは……奥様はわけがわからあ。……何もかも胸にあるものは吐き出してしまいたいように、勘作は大袈裟に笑った。

——まったくだ、勘作にとっちゃこんなものは敵だな。と、若旦那も笑った。

——敵でさ、敵でさ……はっはっはっ。……がむしゃらに勘作爺は笑いくずれた。

しかしながら、大旦那の気が傾いているのを見てとった機械屋は、なかなか動こうとはしなかった。そしてそこにひょっこりと醸し出されたべつな気分、彼もまた他のことは放り出して這入ってしまった。

——勘作さんの唄は、昨年ちょっと通りがかりに聴きましたがよ、うまいもんでしたね。まったく私はいまでも忘れられませんや。

機械屋がそういうと、一方には警戒する心をゆるめずにながらも、さすがに勘作爺は嬉しくなってしまう上機嫌になり、

——こんなに老いぼれちゃもうだめだが、これで若えうちはな、機械屋さん、この喉に惚れねえ女ってえは、まずなかったもんだ、いやまったく、うそじゃねえ。俺はこの先代の旦那からいまの旦那まで、二十年の上も作代をしていたがな、まあ聴いてもらあべえ……

——はっはっはっ。……うっちゃって置いたらたまらないといったように、機械屋も旦那も若旦那もどつと笑いたててしまった。

こうなつてはもう再び話をもとにかえすことの出来難いのを知つて、機械屋は機械を置いたまま場をはずしてしまった。

——勘作や、今日は一ばいやつてお行きな。

——と言って奥様は、母屋の方へ行きかけた。勘作爺もあとに随つて植え込みの中を飛び石を伝つて行つた。

——勘作は冷酒でいいんだから世話がなくていいわねえ。

——あがり段のところにどつかと腰を据えていた勘作爺の前に、奥様は大きなコップを持って来た。

——……これで勘作奴は寿命が伸びますだ。

爺はすっかりいい気持ちになってしまった。そしていままで忘れていた山栗をとり出して、奥様を嬉しからせたりした。殆んど毎日のようにやって来るので変わった話はないのであるが、それでも奥様に腹をかかさせるくらいは芸当は勘作爺には容易なことなのである。だがその日は、どうしても、冗談を言ったり、出放題を言ったりして、奥様を笑わせ自分も笑いこける気持ちが起こつてこなかった。とかく奥様から話をしかけられ気味であった。そしてやがて土蔵の方から大旦那と若旦那との話し声が聴こえて来、さてはがらがら……と機械の音がして来ると、勘作爺はすっかりその方に気が巻き込まれずになかった。やがてそのまま奥様のきり出す話の相手をすることが苦しくなつて来た。

——奥様、旦那は機械をお買えになるんかねえ。やがて爺は話を変えてしまった。

——さあね、だいぶ乗り気になつていられるようだが、……ね、そうなるとお前は大変だろね。奥様の言葉はすがりつきたいような気持ちを爺に起こさせた。

——大変だろねどころじゃござえせん、奥様、この勘作奴が立つ瀬がなくなつちめえますだよ。

——もし買うようになったらどうだね、お前はそれが使えるかね。

——冗談じゃござえせんや、奥様、あんなものでこの勘作奴が働けますか。……頃もうたえねえで啞者おろしみてえになつて……けッ、胸糞むねわづ悪いッ……

土蔵の前の大旦那にも聴こえるように、大きな声で言ったけれど、庭ではがらがら……という音響がますます烈しくなるばかりであった。そしてやがてはその音響は広い庭を満たし、響きを鳴らして家の中に攻め寄せて来るもののように思えてならなかつた。……！ 勘作爺のころは最初門の石段のところで感じたのよりも、それははつきりしたかたちをとつただけに、更に悩ましいものでないわけにゆかなかつた。

収穫時になると、この小さな村の隅から隅に、勘作爺の唄の声は響き渡ったのである。さまざまの仕事にみなそれぞれの唄があった。幾百年このかたそのまま伝えられて来た、幼稚な、むしろ原始に近い機械に合わされた、これも恐らく幾百年も昔から伝えつがれて来たさまざまの唄が、村一ぱいに響き渡ったのである。そして唄とともに木材と土から出来ている機械のなまぬるい、眠たいような音が響き渡ったものである。

が、この数年来というものは、そのなまぬるい、眠たいようなところよい音は、めっきり響き渡らなくなってしまった。そしてそのかわりに、鉄の音響が村を包んだ。がらがらがら……という、ばたばた……という、まるで機関銃のような、騒々しい、いらだたしい音響がすっかり村を包むようになってしまった。——新しい鉄の機械が運ばれて来たのである。そしてむかし村に響き渡ったさまざまの唄が、この鉄の機械に合わされないの言うまでもないことである。唄は人々の唇からは亡びてしまい、機械はそれに合わされる何ものもなしに、そのいらだたしい音をだけ鳴り渡らせるようになってしまった。そしてその機械のために唄も封じられてしまった人々は、同時に口をつぐませられ啞者になってしまった。

しかしながら、その機械の音の中にも、勘作爺の唄の声はまだ響き渡っていた。たとえ勘作爺の操る木の機械の音は、鉄の機械音のためにまったく揉み消されてしまっても、唄の声は村に平野に響き渡っていた。

けれども、勘作爺の堡塁は年々に危うくなって来ていた。鉄の機械は、年々にその僚友の数を増して来ずにはいなかった。そして小僧相手にのんき百姓をしている地主の家々にまでも、ついには攻めよせて行かずにはいなかった。かくして最後に残った二、三の地主の家に、勘作爺は女房と二人して働きに出入りしていたのであった。

——啞者のようになって働いてやがら。……笑うじゃなし、掛け声を出すじゃなし、いまの若え奴らの気が知れねえ。

と、勘作爺は言い続けていた。かつては唄をうたった老人の唇から唄は亡び、そしてそのまま若者は唄を知らずに機械の前に立った。そして老人は年々に亡びた唄を抱いたままその数を消して行った。

その日ついに吉見の大尽の家にも、鉄の機械は運ばれて来たのであった。勘作爺は酒にも酔えず、むかむかする気持ちと、大声をたてて喚よきたてたいような気持ちとをこんがらかせて、村の一番はずれの自分の小屋へ帰って行った。

どかっと炉のそばに腰を下ろして、煙管を口にあてがったまま暫くはぼんやりとしていた。が、やがて爺の眼は、土間の隅に置かれてあった穀臼の機械の方にもって行かれていた。それは醬油の四斗樽を台にして、土と竹と檜の板とで勘作爺が拵こしらえたものであった。春のうち仕事の合間に、また、梅雨の間に、この秋の仕事のために拵えたものであった。その日吉見の大尽の家に運ばれて来たのは、稲をこく機械ではあったが、それがもし吉見家で使われるとなれば、鉄の穀臼の機械もまたまもなく運ばれて来ると考えないわけにはゆかなかった。まだ一度も使ったことのない、まだ竹の緑色もつやつやしい、その穀臼の機械を見てみると、勘作爺はそれをおしみたいような、抱きすくめたいような気持ちで一ぱいになってしまった。……たくさん唄のうちでも、わけて勘作爺の好きなのは穀臼ひきの唄であった。三人か四人して太い竹の棒を握って、ゆるゆると、しかも休まずにまた調子を乱さずに、臼をまわして行くのである。重い、鈍い、しかも気持ちの爽やかな音響がする。そしてしたがって、それに合わせる唄も、尾を長く曳ひく、そぞろに哀愁を漂わせる唄である。それは二人の情人が、たがいに胸の裡を、比喩に託して物語る長い対句からなっているものである。その唄こそは勘作爺が他のどれよりも

好きなものであり、また忘れられぬものだった。爺がまだ若い頃、吉見の大尽の作男をしていた時に、その女中をしていた、今は爺の女房であるおよし婆の若いおよしと、この唄に託して二人は胸の中を語り合ったのであった。およしと二人でひいて唄った朝のこと夜のこと、最初にその唄を別の意味から唄い合った夜のことなどが、いつにない衝動した感慨をもって思い出されて来た。……

吉見の大尽で鉄の機械を使うようになると、もう勘作爺が働きに出る家はなくなってしまう。といっておよしと二人して百姓をするには道具が揃っていない。……せめて鬱憤を遣りたいただけでもおよしの帰りが待たれた。

およしは、だが、何処へ行ったのか知れないままに、なかなか帰って来なかった。勘作爺はやがて裏口へ出て行った。

見渡される相模の平野は、秋の真昼過ぎた光の下に、豊饒な実りを収めて平らかにそのひろがり地平の果てに伸ばしていた。ま近くにやってくる刈り入れ時のために、人々はその機械を磨きその家畜を憩わせて、こしばらくは野に出ないのである。うつろになつてゐる平野も、地平の果ての厚木の町も、そよとの動きもたえずに鳴りをしずめていた。やがてはその平野も、いらだたしい鉄の機械の音響をもって埋められるであらうと思えば、勘作爺の胸の痛みは奥にしみ込んで来る。ゆるし難い鉄の機械が、しかしながらいま磨かれており、油を食れられており、修繕つくりかへわかれておることを、しかとその胸にうなずかせずにはいない平野の静けさは、容赦なく爺に迫って来ていた。

——おいよ、お前さん、何処へ行つてたんだよう。およしがあわただしく裏口へ出て来た。

——お前こそ何処へうせてやがっただ。

——端書が来たんでな、いま大井の旦那みに読よしてもらつて来たんだよ。大変だよ、お幸さんの亭主が死んだんだ

って知らせさ。

——べらぼうな。と言ったが、やはり勘作爺も細かい話を聞きたかった。横浜の電気工場で亭主と一緒に働いている実の姉のお幸のことなどは、ここ何年にも思い出してもみなかったし、またむこうから手紙なぞよこすようなこともなかったのであったが。……

詳しいことは言ってなく、ただ亭主が突然機械に巻き込まれて死んだということを知らせてよこしたきりだという大井の旦那の言葉を、およしは繰り返かえした。

——どえれえことだ。およしと勘作爺は家の中に這入って行った。

お幸はむかし、勘作爺とおよしが見の先代の旦那に夫婦にしてみらった年の暮れに、厚木の町の電気工夫と横浜へ駆け落ちをして行ったきり、二度と帰って来ず、また音信とてもめったには寄こさなかった。ただ勘作爺は、それゆえ、二人が同じ工場に出ていることと、二人の一人息子が家を出たきり帰って来ないでいること、その息子はいまでは東京の工場の職工になっているとかいうこと、それ以外のことは何も知らないでいたのである。それゆえ亭主の死んだという知らせに接しても直ぐに身にしみた考えに落ちて行くことも出来難いような気持ちでいた。

だがお幸の亭主が機械に巻き込まれて死んだということは、やがて勘作爺を力づけて来た。その日じゅう爺のころを曇らせていた鉄の機械をいまましく思う心が、にわかになつと微笑まされて来た。身が軽く、爽やかになつて来るような気がした。

——なあ、どうするだな、一体え。およしは促すように問いかけて来たが、勘作爺はしきりに、微笑まされるような気持ちを失うまいとつとめていた。……

豆ランプの下で、その夜勘作爺とおよしがかわした話も、お幸のことよりはむしろ吉見の大尺の機械についてであった。お幸の亭主の死んだことが、力をつけて来るように感じて、つまりは吉見の鉄の機械には直接に触れては行かないことが爺にもよくわかっていた。また吉見で今年稲こき機械を買っても、穀臼の方は未だ使えるというおよしの言葉も、ほんの一時の慰みにしかならなかった。そしてまた、刈り入れ時が始まる頃までには、いままでに残った大井の大尺にも、酒川の大尺にも、その機械は押し寄せて行くに相違ないとも考えられた。

### 三

二、三日してから、勘作爺が吉見の大尺の門をのぼって行った時に、真昼の光を照りかえして爺の眼を烈しく射つけたものは、土蔵の軒下に置かれてあった朱色の機械の台であった。大旦那はとうとう買ってしまった、と爺は呟いた。

——大旦那ッ！……爺は頓狂な声を出して這入って行った。

大旦那も若旦那も家にはいなく、奥様がたった一人いた。やはり機械は買ったのだそうだった。しかも吉見家ばかりではなく、大井家でも酒川家でも、多分買っただろうとの奥様の話だった。けれどもそれを話して聞かせる奥様が、如何にもこちらの心を汲んでいるような様子だったので、幾分は慰められもした。また出してもらった酒をますぐくしまいという心の働きからも、勘作爺はかなり快活な気持ちでいた。

——旦那も言っていましたよ、勘作、思いきって使ってみないかって。どうだい？

と、奥様は言ったけれども、勘作爺は頭を横に振ってしまった。

——だってそんなに我を張<sup>が</sup>ったって駄目だよ。うちでも大井さんでも酒川さんでもそうするとうんじやない